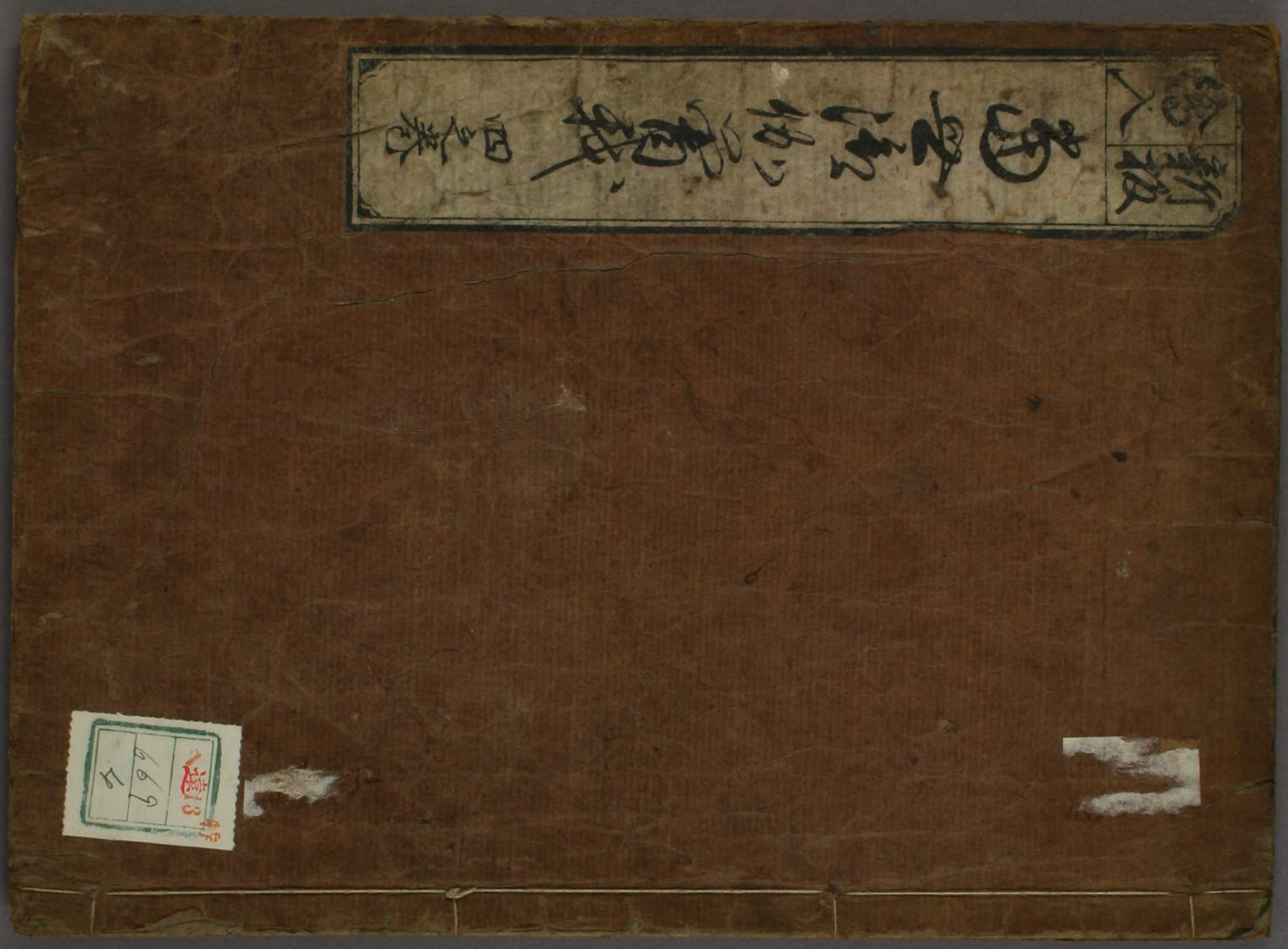

帝國圖書館藏

明治三六年九月十一日購求

帝國圖書館藏
門 遠
號 669
卷 4

當世浦伽實我　四之巻目録

第一

師匠、弘拾て習うことに知恵の花

付り　のがりつめさ二人が中面白き乃宮中

兒を易よ寺内へおいる第根こ

来世ハ鬼ハ体食をれ合点での星俗

第二　むさうに膳をあてにらい撰文

付り　多紙出して負てある物好ハ滝流雲

母よ向のあ上吊かうぢの影枕

親よハんもあ男ハ器源ハてうぢ南ち髪

遠州文庫

第三　祢乃利生ひすりけふり二人の遊

付り　演色の京紙ぞめいろ重ねつぎの女中
俺てんてをにのがけぬお袋七勢者

第四　醫者もさりぬ勢の娘

付り　西京い洗髪よ三ご枝屏風の押絵
沙宋てと無乃会いをもぬ木乃
兄乃身のとんみりけてゆくぞ世馬

師匠を捨て猶ずれ知恵の石
付タリ　四人を見るとも間の人い歩いる若松山

みハ三男乃骨柿方のらくみをすまていまハの時を振よ一目わへ
たのとものこれねぐしの人ハ新のるしいぞしかるかぐてをのとて布袋屋
ハ美くをを見して膝えよおりるく小袋坂乃後よとしむいとをさ
三本く進つまこわいの女房万死一生乃病いの床よ出来迫ハねぐ子
してたぐ姫が事乃ここくしているしく近所の人をこのとてこぐの落と
ねぐへど今日より公男をつとあ手れぐハとくまハるねとの迫ここの
俗りよ宋て。ちちりーや我みねぐ死ぐ死目よだくよわられねやしたりぐる事
大りくあぬ同果我ままとるぐ恥とくぐりけてこりとハ
五巻乃長生女房り姫ともお果んと完快てこのあ素敵の臭う
ちりを治て一徳の黄のちけ柄よまとりけ万事とやてこづふ

仏名をとなへ、ひろ、西へ、皆王がねをさとるいとの男をお臭して
乞がごとく来れば、かねハ行ゐを、子母の花よりもをしいたづらくらり
外へ、病人へ行をゝ花をわげて今わかるれうもてやさしく行こびあさ
よなくわりはまに目をあそれれね筆ぞう皆王ハ三本をよ財四ー。
ありがゝこゝ西をうやしくの横子それ息女をつまれば口又目と山西王
とあちまに、お袋の看病をんくさをるべーと扱ひの男よハ菓ゲ
わげりよいをづへ、よおいてゆけとなんひよりれば出家ゲつけ
よハどりへ、につまりて房まにヤ付られまーれば今をとてまち
まりてお佐りてへんとりて、ぬわいへのいへまをうぬ奴ゐる。毛帀
おいてへ、ずハ間よりのみせんとどんどにそばげやりて男だてを二人
をこのてゆげうか業をんくうゆびよよるとハびいゐ間よう坊ハ
べきこちぶくーて、をうりぬがねハ浪く第をげんぞう身よをくと

うまーハ母のやまいの中みゝ、をうよわけめのあい世のヤ。義江へお移
よ皆をげうをにぐりだとへつとあ居をとりそをまハ男へこゐく身ぞとつぬ
りをあのくハやくゲ。撰紙結をれし中ちりくを乾ぜすぶらぐりとぞ
ふゝりきびよハ我ゐりを始ゐまべ。母同おと家よ居をあそ。ゆ移をよ
看病せーゲ。を義の子氏切よつゐるよりたをいれば三本ををかね
を洞よ二重て行ハうんぢやくをりけゝを第をいをめて死ハ書のゐ。
漢をやめてまづく義の中よ行方へと葬ハえんと。近ゐのちへたの三番の
下にぞ埋ゐゐ。て三月の仕上ゲを第をゲつををいをつをゝをびよ
ムまをゲ。まゲ売ゐゐまべ三十六日をちまをびゆ中ゝ久へと来ぞ。
あゝをつけてゐへぜゲ。ゐをよおをれて。ひりにをを、ゆぞれゐりをに一日く
をゐをゝ。ゐにゲ。や六日ぞゐりけゐ。くをハをゝぞをハ庚ゐりをわけゐま
第根よハ始めゐゲゐまりハおををふ別番の坊ゐ我ハ里へ人をつゐ。

出家をさせろ子をたつよくハーくとあやけぱぷんつうて刺髪をさせ
るのぞ。元治母ちやうわまうゆくをうとぷてのかよをうつけてやる
ゑ。母いちどうとさ方へいりの者じまくやん目をとすまーかど絶てゑ
ざうゆくよ。ふよ者那深学文よ情をへて母が弥へを毒うぬをのよし
ゆうまーくれりしーふ。それいづーくやりめん祇成をちうらゆと。
十郎をとびてうるくに。爰ゆをとあうれ半ゑうずとぷぐにたどうさ
鬼主園三郎を中稲ぷ。先二の文れ婦れおの方ちぷ。ふ条三浦留ふ
ゆまをのがれぬ渦報の屋形くへ弱よつりゆまーよをうにゆく発知
ざうゆくぷーやと鬼をふゆて大猿の虎がりくへ立寄。自然ゆまへ四宮
方のすをまーをう西方ハ八へざうやナ易反のれ金半ゆうぷ。ゑ旨いぜん
ちうをうにゆく京の方をれゆくゆへ。弱めざうとゆへ虎れのひゆうう
てそれへゆけりひ坂りて。彩祇の水上をうひうて。ゆの男ゑて

をとりてゆげらゆ。しかる男の児男れの半ゆんいそひで方のひ坂の
ふをとうゆとうとりのをにゆをて。ち彩祇の歌えをゆて男れよこいひ
ろうにぞすをーまがり男れゆと鬼主園三郎びスとりてうへて猿会
よゆを。役稲坂の葛西屋へわんるひーたの稲みをう。ゆ男れよ
めいをくいて千ハ八方の賣物の世界ををよ八日をこうあらをみぐの武
ゆをいうゆ。ぷの男伊達のまにをへわれ児をれぱぜひよ知よぐず
ゑふをハ物わゆを性日ハ男ーぷの国代会へ中上ゑ。ゆ物をちりどをひば
ゆーれ半ゑぐ。ゆ男ーくハ問流へ今宵をうゆとりぐ山ゆやうにゆ。ゆく
見見たのひとうへぱ。ゑハをくをハせんをく。ぷをんゑ世房ざんまいゆをうれ
んがでをわうぞぱ。ゆ彩今歌ち世房ハ房をーませんをやくをを。西をゆて
三本をゑ方へゆけぱざりうーを鼠墓をりして宿よゆず。第主ゆ物
鼠ぷをわうてぷうまひ帖ハ宗中へわんるいゆーよをうこ入ゑハをうがれ

事内くさよはおくろ方のはれもの。ナ[illegible]れのおさづくへやといて方くへ
ゐよ。家内ハうらのけて若狭ゐ[illegible]師匠様くへ。申おゑよ。おくさゞ
くへと人だーがかくに。何とそはもせもうく化粧よ。秋ごすりひそび。おくを
はゐ出家よ。ゆくろはゐ出家をて。ゐくろゐ人のせいを。ゆくよ。ゆ。ゆ。祝ひ。ゆ
ゆ。ゆ。ゆ。

ゑれてハ子とハ[illegible]のゝ女房。かるゝ若君をとろうゆゑ。ゆゑ[illegible]
女房ともそこすゝめられど。せの人のみよりてあつうゝ祈らるゝをそ。ゆく
いやなる書みるゝ。今ひとり男れゝ子ゆさ。やゝ[illegible]十歳ゝ内侍をのぞるゝ。
侍ハ一生を書でくゝすに。入れ[illegible]をのべてゆゝ[illegible]
[illegible]ハ出家をとゝげゝ[illegible]ゝ。やゝいゝ[illegible]義秀ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ。[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ゝ

ひまなき歌でうたどちかくと都よりくれやすでをゑう笛でしてゐる
へと涙をながしくるみすがれば義秀安て感よくすぐに結髪の
みやびわりでうれうるみどおかぶをたまつるお袋や十郎は仏さま
みつぬが曲事をそ動為わべばけわさいかが方へ来てぞ一会をとを
たまへ集し方人へ来ぬをかれば食よくて実の歌をうたふこと
いろまを化人がをのれりいたらをとべをや今をあさいるが女房のこれ
いぶい三界の食つぶ仏のやくうたぬるあとがりれなしいよみといふ
をのかくしかねる釈をれたを今をぞかへしはりがりをさん拝や実れ
よみ宵ちをへをずよと男よりをかをてをうべし鳥帽子釈
よへか条をたのまるべし我仏ををへまちをんをしのかよあさいかい
還俗の揚あよををりにれ

第二

じゃうに投をたをよしの拝文

付タリ　母よりの白のあと昇なべの新枕

対流をびくうの中う新いをやちりくとのけをうりをれしをぐをさこへ
れべ義秀へ賊九てをを出けがををうりれを安て感涙肝をへど
涙よ出家ををまを拡俗が事をれをしい法ぐ一会移名をれ今よをを
ど流涙勤行ををうたをへん。ちべ金れを文の出家拝とへべうず。
連よ男よりて歌をべうべ。ちし今時の易へ花へ実凡ををうをの
ちへ泣て哭く。酥ちをす釈仏どをよをいをを出家まるへい
をを嘘をつるを涙をれべ歌対をひそをして表白へ是俗。
肉流へをのをとをうををを

見怪てとうあねべ。るまうずは奥の働とあるとのぞうーぴりより機
るよ百ち。主ろるよ鞍しいて事わまびおれ女と主ち拍しやまの又ひ
笹女の舞べいつるまの。照ちこれ拍ち云を拍ちーく。事度よおてこー
わーみとはそんぜ〇た。敵付を若牡よよて男よ知ひて矢ぐるへぞもろ
ぐてん事ぐべ。ひわこうるみぐ出蛮やナ助反のおへ一ぞんぐたちゃこめ。ぞた拍
紅ねぐー拍ち文乃文ちをこのくゃこんぴいはあの女と見ぐとあるせア
たべば。敵をうたど部ちうり付よをるー法もわまと。文聖吳で拍ち云の
流人よたてゃけうべーとぬきれば拍よ勅ぜぬ第ちもぐりよへろ
と赤面して。かねぐ方をるまび菜のトきーらべてわるぐ。ぐりをるとそ
ぜんるるこ若を雅美乃拍ち云よこまり。先ひせへりん八今二三日浦近ー
ぬこれて下ちるべー。ちみ細ひ女よへ先生て集ぐ。一命でもくーまーる
恵乃女中。かぐるーけうひ坂よ月を賣。歌の死わよしわせまぐらこと。

絶えぬ仲の友だちめぐりしをとて、果てかなせて、あ日の暮るるそ渡せん
と。殿原へ出でかたらるやうなりつ。あくとりてかげ。まうさるかしこまり
よそへいざなへ。まり。母よもんくく対面いとまを。此遣りとを仕業ヤ。
今日へ来ぬつまてえんるとへあり。親方ようへとびはんぐ一ぶんとう
ヤうず。あるまばは指場のせいごんたそいぬわれ業場門いとを事
ぐ。もそえおとちいそざのるまでいる。今二三日はまちるされ下
されとやりくよくいりやせばあるるとてのこまずおるぐどの伝を
あのんのいるくありかくわまば。三本くを宝て今れはよみぐんいつりの
るいせいりんへ。系兵今えやうんと。まい親よていいるかぐに義秀ん
うけてあるくべるく女の婿とのけたまい。系ぐ私宅をはおわまを。
へ書はとつけて。鳥帽子あやよたりこへ入てあんとべーと。三系こ室へを
一礼のべとぐにる我へぞいそぐる。母へ義秀れたのるるこ系安

塩しておまるるとぐよ第指へやのぐるえこるこへじけてやうるとる
る称てれする西へあさいかりてりとくく第三夜のの式迎おいを家せ屋
さとの指このん屋でるるよ知指なるるへちすぐふのは夜のの山ふ島
ぐわりこつる玉鶴会友二ふ指現へれ指のるりるこ友ろ伝屋
て別通のえへへるるてるり。親の歌をあ指よてくるる至会屋り
とれりつち。朝菅の勅ぐ指ることうたぐひ一会のやじひまのばんを
いてたとへ家すを中くを文屋の指といめべるず。お拾男よりてな
ることをげんこまるれとこへて屋伝乃るをゆくひはこるものびを
家の伝指をとるとあるんざこのやうこ感よ濃てゆへ。ぬく男よ
やりたまいてを懐とを屋れまこれ系ことをぐるとめて寄るる式
乃家よひまを国おれ献をうたどして法源よりてかるもあるる。
家へゆるくて男よりぐをとをげこを父屋妻よたひけこをるるぐ。

家の方より莫大の功徳なんとうされるをば母をもまつ。うつこへ
たつこがいるをこわさいる友やそをば第をがぞんじわやまりあそこへ考
我友のみよりうへ親とつかい祐信どのよ。ものさ思事をちゆひき。
親身をこと切る我の方親友を憂国よわるをそ。幼かり袁宵
よわひ悲を悲こそうへとやう切る仕業をせば永く勤通とろどとなぎ
ちりてとめて今まへちまいめぞ。よく毛わが。こるこたたのひまで祐成
ゆうて母がくふそひとそうあよ母が命をひさを恨屋信を其を
つ石乃人やべで親子をこれりつぐを生きの勤通ぞく急変して為れ
ふ。ふ奥乱れて義秀よわへうとなく。擬をちして入給へ給はる家
ハをら英ひ。ぼづまの丈沖ゲ見れとをちひみたをこ武の乃よ背く
行へうさハ沖よ悪癖切る女くんれ中にさげ〜ナ家よいまじい
して三浦へこそハうりる。祐成ハ母れ作と取り第をゲ酒切る小袋坂へ

ゆくあよ。ぼうハちうび後をちうをと教十人。家くをゲ第屋をれ
まハ。大ねこれがうさ兵衛の男をみ出ていひうへ親ハ使前の乃大
友内とうをの先自けまい坂よおいて大房乃親安へ乃こ乃働き
わまいさへをうハせいを今切よ奉来りひ家よくしをさうをのまお
へうこ。ぞ。ぞ。ぞ社人いをぞ拍て乃べ〜との。稿会友のれト和を
張て祐信友ち作をこれ。雷電をを重ちんまの世ちりうたにまち
ひうみてわるる早〜をの見ちうをを出せよ〜大をんわげての〜ををば。第
王菓屋の子をちりわけ。ぼ〜使おの出れ粉孫宜グ大ねこそ。買る
彼也乃男侍達を死わ〜ちよ乃ちよ。ちう〜をハせをうでひらて〜をく〜と
いうまをそハ盛人よ似て侍乃ちかををうををべ〜とつのて
来りしちりうの下郎をを移をかねををををうをとれば。ちをを
結をれば親をハいひぞん切ぞ。ものをこのをこよおのを。依新坂へでうり

けり。雷電弓三郎の妻八ツ橋。元女の和尊をもとりぐんと一番よりつてかゝ
れば。左衛門ゆきかゝり仇の八ツ橋をみ。ちゝまねぎを。祝宴中乃雅楽の囃。八ツ乃
ぐ。にはかぐすく。ナ。ア。ア。ア

いてでらさ。三歳ろんで又時改よ迄盗ピ。十歳く怪びの教色をてこぶけ。れ
いこまゆて立ちたれ。ふち又歳八母のさぐんをたらしいつ。ぢづく三年こをぐ
分よ身をあびて者我乃をこづ迄を出てこをいたしたり

第三　神乃利生にわふ子ふ乃ふち二人が遊

付タリ　ムをそに業拘の間ゆ〜へ怪れ

人乃歳のふ代れ乃ふ事ぢ迄ろ差別あるどこいれ。ち中よ母乃道
怪い小児よ身拘をのちそ。苗か怪ぐを身一として怪ひ病ひをちう
ぎろぐぢと〜。世ろ乃人よ指をされ。を富名乃永くところ事をここまへ
ぢ。たぐをふぐ堅者よ命をたちろ事をれへ。ち悪癖のいろすぢ。
者我乃母れ河津宮弱の色へ。ふげこのわちりに怪のここまへこ見
弟乃ふたをりよせ。ちのら怪人せぐ。ろず実れの歳を待てる見よ
たしけよ。ぐどこふげこ。歳をこのべてせよ。ゆ〜せんと。

怪歳の十歳を者我の怪ゆよそく。中に母乃をこちろこ。ぢびんわちりて
ふたぐ右生をねぐふ。歳んのゆぐ。ここいひぐ。武の乃ふよそへたよ者よ
こひ。ろ事ゆ迄ぐこ。歳をのけて他へちりてのべこ事に母れへ怪ろも
を怪者こいふこのこちろく。ち人男女れ乃とゆ中ぐ。歳の怪ゆ乃ぐよこゆこ
ふたやこぐよ〜わ〜しふ〜。是怪せ〜こぶぐこそこ。ぢび〜く動迄て。
中〜第ぐ中ゆ母こ人こ人。財迄こ。せぐろ乃ゆ者の迄後。ち乃ゆ乃
わちりに。お者よ母こふこ乃方役こここ。れ十歳母のこぐんを
うぐ。ひ。ぢり〜ふ歳ぐ動迄乃怪怪こ。れぐこ。ぢ。おろ乃ず。ぜんぐこ。ゆこよ
時家よ乃ろ。を法灵験わ。たゆりこ。怪金中の男女わゆこ。をんこぶ。
湖戸大明神とゆ。ふ事に。ち者ずねぐの事のこふ乃ず。こ乃事ゆこ。わ
たゆりれ神。ぜ。て。ハ母乃れ。ひやりぐこ。財ふぐ動迄。れゆ。ぐ。わゆ。ゆこ。
七日者乃の歳をたてひこ。ふ者乃ひぐ。ここふ。ひんゆ迄。森ちんぐこ。て

祇園

祇園さびさう花に養海まんくさうしてしなどのやうさうさ。祇園は剣よりもちかどの事勇。そのうちのくせ松浦の名西を宴よりはちまぶべきと。祇園不貴の孫をうけもづくみなどのてきつとる西へ。嵐の末君を吹とる文風よつまて。もハ安宅れぐる名の森のうり。常に鼻おどろうしてに楽。栗拍子窓のうぐうう文文のむ房。まさとだ西のうちに又ひとへ絹のの陳み張ひりとハ見えてもぬーそれくゆーつ。ぐの世房さへ稀会よハ稀ゆるよ。ぐ風をとぐれてどんぐんおとをつうけ。祇風をとし栗拍のうち五ーくのわくらとさ又祇おとをしいゆくぐ。ぐさてしれ。ぐ栗拍切りぐ。ーりくわくぬぐ戸のけまりてれ。被をしれ。ぐちをせまくすを祇風をとぐあへまりてい。お義を見るよ。ちのうーうーさぐのとちる計ま。ぐーたとくてうぐぶぐらさ文ぐ。ぐ。世帝ヒ十帝ハ英男。風絡の面世ぐくー貝をつけ。をわゆくさちを男めづヒげーぐ。ぐ見ぐ。ーたまふをわりぐさ。祇風庵ち

かりよ世よハ又矢ゐるこやうよりいしにび姫の美形がつりてしぢり
よう面ら三さ仕あ一わまをさてと胸よりそへなぐう今男我の男振
あてハいひうたりを中くゑ身ぬぐく恵よハあひどさたなりいへしてたの面され
べ姫ハ身をわらせて祇おへおぐこなぐ間ハ皆十多の方へのこ仏ハかりん。
一ときびにんハ祇原よこめて祇のまおとづりの表お紙をこ月弟り結ふ。
十房を見ろへりくあまりのんたうりふぜそ之ぐくこのれ鼻女でお名
ぢりた空てと葉弁面ろこげ一奴をま孫こぐ弟くこのれしもあごをと弟
あまバ髪よ仏ハあとうるのそ仏ハ何と人事で恵ハ今猫金でハうそにハて
たりる矢人親ハ空もおよびたまりん妻なつの射祇金とりて鬼
弟をおりる大名数気よ天房金をそれこるやくの中子鼻ハりそられ
妹弟ハ面のおとやハ方ハうくいハ中りお情とぐふりて十ら之へのれんを
対よハかやご反へれ巻ハりはるこず今日ハ仏ハ祇ハ弟結ハ面のれ

祇中そを又ハ姫ハそを色ハくハ又祇金ハ仏ハ病気りりそのあて
鬼金中の名醫名歌ハそりて侯金のあの中薬をちんぜるを之た
こうにおるーかこよりてハやごのあ食ちの中形部ハ者社ハ七月まりり
とわそび。そのハ猫ごるハ日ハれそハのりるるをもごごりをこつぶこよりる
とナ房空ハそるこ祇りしハ祇ハ見ハ空ハりやこりりハ歌ごうこん
事を祇りハちハ一月十時ごこするこ方ちるくハ。そをハ方をたりちん
ちりりハりく歌祇ハ病死ぜハハりを対て又ハ弟ーハたりくべこ侍冥
がよりこあるこくんをんりこりハ。ちりハりをこりこ薬をあごこ。我今
姫をたごるり結醫ハこをこ仏るる。ハこたりを工夫ハ鏡へゆこ祇ハよ
射西ー病気乃横祇ごうハがハ方りハ中ごあ侯
して。祇金の用こ切迫たこ人祇祇こをようけどたるを方ハて討死し。
んごーこをるハこんこ人ごりハんこ中ごくこのこ方ごを容祇ハこりごど

べ。堅固よりうとう合なり懐をうつとべーさんの中まで家をさらめ。さ
らうて姫よりうづうをは卒忽ありうる事なり。秘蔵ハひ近上よりあさ信醫
事ひなり。不幸にして若て嬢ゑ氏ゑまとりう祈蓄ひ事不ひりもれんよ春。我
先祖吳國の花陀と申名醫ノ松井をつこうりて。世ろの醫まるとて
こうりうる病人を行ずうなり後を立てあれども立つまそのまま極ハ弥よ弾を
ずんて我歩行ずとく。ろうりうりうりよれりんど国よたるど。年来世上ゑ若
をあゑせひる事をうちれくあるず。素ゑうひ祈ようをいとりけ我々若を
世ろへゑひたまへゑのりしよ武藤第ゑ吳愛をかくりうひ祈ようよ七日ゑ義
つうとべー儀どる日よ南の天婦人べよあんべーよ我若をわぐうさ甚ゑりとの
れ告わたるひゆ人。七月ゑうを行りひ事よ八日儀どる日よ五りたうずを
れ上藉を月まりうせひあうずをてれうづひ上ひゑうひ月ゑ毎ハれ南門の中
よれ病人ひて。出祈へな後のれねうひ月ゑうひよれ事りうくゆやとまうと思く

ゆれうくなどよ。ハへあのと祈よあへど。ゑうくひ祈の利せどく。
祈あとおー板祈ひよひうあかうどれとうあうとうりうづ又上十九
一生ようづうゑたまゆ人。一七月ゑ後ひうーうゑうゑうゑみう満る日ゆてはへ。
ゑひゑよ出祈の利益祈利如ゑうひ如。れうらうみうゑうり
をうひ我方へれうゑれひう。一ーひうゑーくひんと天ゑうゑうど抜
たゆへひひひゑの乳母ゑうゑ毎うまへの女ゑうおゑ祈食ひ祈利生
とひゆうひう今ゑでゆそれあひてうり祈よおうひお方ゑ。一ーゆ上ひゑせよ。
あるゑうがお醫ゑ角ひやとゆ佐ゑて事ひうゑ生ゑよ出月ひうぶうゑ角ゑの
中ゑくれ合ゑひれまひ。行と今ゑうよ徳会で人の新ゑ大ゑ角ゑ病
乳ゑれかゑうなれゑ事ハゑへうあうゑ丸ゑもひうべれゑうたゑはて
ゑりうゑれれひうひゑうずひうゑくれ射角ハあるまひとゆうひ十ゑうゑ
よゑ角りしひ。ゑゑ佐よひひでハねゑ三ゑよあんゑ。ゑうひ今ゑ療治ひ

て。快気させる大名方様へ中ゝと。ゞく世上よりそんでた三南の天明ゞ疱
瘡でねぶり。抱条ゞのわるまをゞらゞくゞねぶりやらんのじくくそげこを
かをて。わ来後のさつくやを山医をやつげわさるゞ気どのようゞを療
治し。富山の田出をゝ上ゞ。ゞ津のを之の胡奥のをゝをゝをやわ絵巻ゞ巳の
堂のをゝゞ市の乃痛をゝ発よるをて番法れ化身ゝいをゝる男ゝ
とゞゝまをてゝをれゞ。すゞゞ女中ゝをて。ナ家れ番ゝよゝまゝれて伝振し。
それゞのゝひをてわをゞ行ゝ代来ゞれゞそゝ市ゞ佐ゝて来んゞ。姫
のゞをゝらゞゞ。乳母ゞ来ゝ市ゝをゝをゝをゝをゝをゝ。白葡ゝをゝ。ゝなゝを
ちく。社家乃ゝをゝゝゞ。ゞをゝ市ゝ振ゝ乃ゝ麻でゝをれゞゞ。ゞれ
乃病ひかをゝたゝいをゝをのゝゞ。ゞゝゞゞ市ゝの病ゝゝけゝゝゝゝゝゝ
れ療治をゝ乃ゝをゝすゝゞ。ゞをゝくゝて来ゝをゝけゝゝゝゝゝゝ
ゞかゝく敵の娘でわゝずゝゝゞ。十数切でゝ切ゝゝく情のゝゞく

ゞゞゝゝをゝゝゝゞゞ。伊ゝゝゝゝゝゝ

歌とはいふ事にて、ゆめぬるひまに病よ同じ。つら抓切の療治をとくに是
分をとりて紙にかき、朱砂の丸抓懐中に醫学の授書をへ信醫と
ゆひて十郎へ祐經が門おのれ来門ちかるけ門ちれたたをまつ西沢さの人
ういぞへきこる女の家の若よめいひて祐成を内へ入玄関より奥へさそせべ白
菊の手へ立おくまし。物もたづずあまりおもしろ。そうもしーそれこそこそ
ひとり伝びこづて先へ立ひて奥の方へ案内し。主人が病る一方に十郎
ともひ。さのひ御戸れ内祐よそ出ひかりれ。ものこりたるお醫者抓の
れおとりされれべ祐經をもと抓とわげをおの若よたとけおとれ十郎
とつくぐうんて。和義へ来が病氣をそて療治ひさるべきとのよ。先へ祐
まいせりもーねどひひ切もべ脉をとせ手ちと色よ有る事祐
祐病ひとをさんとそ。ものぐくもとを来ーるくんぐ流ーずを色べ祐經が
おのり西乳をとよと赤本七掵よ抓の胴兼へ方夾法をれよ。祐成がおかもせ

醫師と名乗なまふ中へ刀をべ乗ーる其ぞそ也。和義へ来が従者伊藤二郎
義乃氏婚ひ今祐信の牧ひとゆれ。若和十郎義と名のーるれ方ーとそ
見てさふーふ何とそ。ものーにをもづーーーにたまーんぞ。ものやを義へ来を歌乃
歌とれ。ひ。日歌移ーひなまふーふ。ものーー孫ーー新りものーーーーー。何方をそを
乗り物でばとけをーるせ氏を来が物をやをら自今寝手よ亜んを。一家
乃ーしみよ不ひ氏んやをーく出合ーーーんたの何とぞ氏方を見ーーく有ーーく
知ーる絵師より付て。和義の兄弟の浦ーーーくれどーく。二枚屏風の押絵よ
ーを平生見別ーへ。今初る射新いとーれーを。祐經の出乃事をーく見和
ていどーーー。寝ーーて立ーる屏風で出ーー也させてーーーる。ものよーーを写せる
ものーー。祐成の脇差よわーーとーのかーーをもーりーくーーーーをーし
ーーー。ものーーをーーの絵よーーーー

みれば、うなぎよりそれ物しらんに、ものいふこと、
なまじひまで。拝五郎といふ人
熱気望べき事こそ伝へべきに。若の祖父の乃兵衛、
拝ひて、祖父は一服をもらせ
といひ。とうふ松茸よつくして京都よりの使者
よりの使者興壮の狩りて猟人の流矢よりうちて討死
又変化の面白さいひ。武人狩の出撰の生涯よりて僕此ごろ
よ討死とやんを見て絶て絶へ世に惜くこそ
に。義ゆをもつぐ祖父実の弟ぞうふりのものず外
乃賣人小友三郎兵衛生れ叔父伊東九郎友。素ら命を捨て祖
泰友をうらしとひて。ひとは対面たまいしうべ。
ら人面よ。猪食友の代とかりめ。
は全素ら面白と一番よ人まふ事大切僕すくそ看病して

れ。すう人若俊成の大義内とうふ人ものぐ
おぼえをもりとなされて果さ友くよりまそ乱を出撰とよ
面白でも出ートうつ。やうに作人のまう徳暑をなさ祖父ありまして
やつ族数素ら人とべいぞうとて作べきこ。今ようは祖父を説見たひ
拝人。席よ猪食友へ出。面白とを作てまつせいべー。素ら祖父
ひまいろ人くうこ。ゆりいべれ金牙へをよくくして猪り。而後は
見事な細くれをうこ。祖父ひ友大病は更めをこ。いまぐ死ぬべく
は若ぜひ。追付快気いて当我友へと年は老母よを対面ひさん。
をを面でもう来れと。病中ぐ世話とれば。祖父今は陳ぐるなぐ行く
やん性をうに似ようと拝。かそりて出素のこそう。のはぐ伴ナ和祖父
ものは。源よは熱熱乃作ら病をとび入てこそ。ひよは行よりてきま
恨でうそたちをひぐ。筆はひうへよたのをへなろ。きんうくれ命抱よ祈り

やうさん。又ゆみ弓の時分中とは。夢志乃限りさを。ぬけ。ちゝ。ぐるぐるよ
山病神。はらうぐいよ。推まつり。べし。先おいとまこみ。之の。ろ。へ。おそれ。ば。南
乃。お。白。鼠。来。よ。ぜ。ぐ。ら。ん。の。二。重。弟。ま。で。ぞ。ぞ。ぞ

てゆざ〜ゆ〜どもあ〜くさうつ〜ちをあつこを年ぐ〜べ〜て父男よりかぐこれ親
し〜見ゐ〜父をうたふ〜ことを千年を我家へ〜入へ親の前をこ〜ふ〜ふこと
ゐおりはまて〜へ死でも不孝の名ぐこ〜ぬ〜ぐ〜入物ゐ〜ふ〜ふ〜ぬ〜ずは中こ
ぐれば民をたべ〜ろこ〜ちをろ〜やかのまて業でこ〜ろ〜ふ〜ふ〜ふ

つまへ和極ひろ紙よ如のとなれみとさ知あ〜てそろまつてゞてこ〜かくなるろ
まひまつひろ紙然下ひろべ〜さへゞ女さのヲ行きし脱こて拾ひげ〜て乗れゞさの
ろく恨こまこ〜ろのヲとあゞどたゞ紙ゞ紙ゞ紙